

NO.37 1999.1 (株)九州地域計画研究所

- 謹 賀 新 年-----

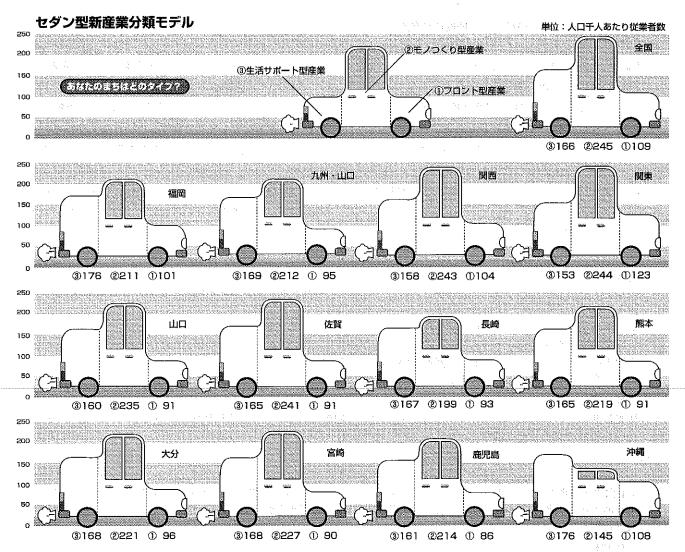
あけましておめでとうございます。

「よかネット」も1993年に発刊以来、今年で7年目を迎えることとなりました。時折、貴重なご感想やご鞭撻をいただき、まことに励まされる思いであります。 今後とも所員一同、知恵を出し合いながら、役にたつ地域情報を発信していきたいと思っております。 今年もよろしくお引き立ての程お願い至します。

平成11年1月1日

所員一同

目次は2ページにあります。



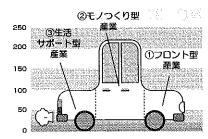
あなたのまちはどのタイプ 現在の所得が多い地域は、②モノつくり型産業(キャビン部分)が強いところで、将来が豊かになるのは①フロント型産業が多いところです。暮らしやすいのは③生活サポート型産業(リア部分)が充実していると考えられます。こんなことを考えながら、計画づくりに取り組んでいます。(2頁以下参照)

地域づくりの方向を見さだめるための産業分類

― セダン型新産業分類モデルの開発ものがたり ―

結論:フロント型産業が強い地域は、次の時代が豊かになる。座席部分の産業が大きい地域は、現在の稼ぎがよく、今が豊かである。リア部分で働く人が多いと暮らしやすい地域となる。

- ①フロント型産業(フロント部分)=地域の次の産業を準備する産業で、金融・保 険、不動産、レジャー関連、新聞・放送、情報・広告、宗教、教育学研機関、政治・ 経済・文化団体など
- ②モノつくり型産業(キャビン部分)=農林水産業、鉱業などの自然からモノを取り出す産業、モノを加工して新しいモノを作る産業、建設業、エネルギー産業、以上のモノつくりを助ける通信、卸売産業、国家公務など
- ③生活サポート型産業(リア部分)=小売業、生活関連サービス、医療、福祉、地方 公務など



●1・2・3次産業という分類では、地域の特色が出ないし、3分割しているという意味がなく、今後第1次産業の比率が下がるといよいよおかしくなる

1980年頃から、2000年の予測がたくさん発表されだした。その中で第1次産業は従業者数で5%ぐらいになり、第3次産業が65%ぐらいになるというものが多かった。3つに分割するということは、3分割によって比較がしやすくなったり、その土地の産業構造の性格づけが分かりやすくなったりするのでないと、分類としての意味がない。

もともと産業分類はペティが考え出したと云われて

おり、それをクラークが整理して、1・2・3次産業としたので、「ペティ・クラークの法則」と云われている。ペティの述べたのは、1次産業より2次産業、さらにその他の産業の方が生産性が高くなりやすいという考えである(平凡社百科事典の字沢弘文の解説から)。3次産業として3分割するという考えが、ペティになかったと云うことは、なかなか面白い。よく考えてみると、私たちが3次産業といっている産業が、なぜ一括になっているのかわかりにくい。そんなことから、4次とか5次産業とかいう言葉が出だしたにちがいない。

NETWORK	
地域づくりの方向を見さだめるための産業分類 -セダン型新産業分類モデルの開発ものがたり-	2
直方の鉄工の歴史と今 〜筑豊三都物語・パート 2〜	5
大宰府の街歩きへどうぞ〜地域資源を楽しむまちづくりへ	8
太宰府の商店街が変わりつつある	- 11
高齢者のための住まいを考える ~高齢者向け優良賃貸住宅セミナー~	· 12
自然の恵みは豊かだったが、火事もあり、病気もあり、そして夢もあった ~59回地域ゼミ~	· 13
- 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1.	
観光振興にシンクタンクはどうかかわるか? ~第15回地方シンクタンク合同研修会~	· 14
過疎化の町にシルバー世帯がやってきた。~隠岐島の西ノ島町で田園居住の試み~	· 16
近常	
グラウンドワーク in ふくおか 〜英国 GWT スタッフとの1週間〜	· 19
3千円の予定消費が2百円に。使うお金が少なくて残念というお話 ~生月島くじら館にて~	20
事務所近辺の天神・博多散歩Ⅱ 天神に最先端技術の鐘の音が響きわたる	· 21
所員近況	21
本•BOOKS	
「偽装するニッポン」	23
「エビと日本人」	23
	20

気になったので調べてみると、経済企画庁で別の3分 類をはじめていた。

- ○経済企画庁の3分類
 - ①物財生產部門;農林水產業·鉱業、製造
 - ②ネットワーク部門;電気・ガス・水道、運輸・ 通信、商業、金融・保険・不動産業、建設
 - ③知識、サービス生産部門;マネージメントサービス、医療・健康サービス、教育サービス、レジャー関連サービス、家事代替サービス、公務、その他

これはそれなりに努力のあとが認められるのだが、商業は卸売と小売では全く性格が異なるし、知識とサービスを一括にしたのも気に入らない。それで、この分類の考えを聞いてみようと思って経企庁に電話してみた。竹下内閣の「経済社会発展計画」をまとめている頃で、「実はその委員会に、この3分類で出したのですが、いろいろこまかい問題を指摘されて、②と③を一括して2分類で出すことになってしまいました」と云って、2分類の資料を送ってくれた。分類などというものは、特に人文社会の概念については、どこかでアバウトに整理しないと仕方がないものなのだが、国の審議会の先生に難しい人がおられたということであろう。そこで私が独自に産業を分類したのが下記の通りである。

- ①物財生産部門;農林水産業·鉱業、製造業、建 設業
- ②産業基盤サービス部門; 卸売業、金融・保険・不 動産業、電気・ガス・水道業、運輸・通信業、対 事業所サービス業
- ③一般サービス部門;小売業、飲食店、マネージメントサービス業、情報サービス業、医療・健康サービス業、教育サービス業、カルチャー・レジャーサービス業、生活関連サービス業、公務、その他のサービス業

この分類は一応気に入っていて、1・2・3次より産業 分類としての意味もはっきりしているし、90年頃まで 愛用していた。

●産業分類は、地域づくり計画をたてるのにわかりやすいものがよいので、「地域エゴ」が大切だと思ったもう少し前に逆のばる1985年頃、地場産業の振興計画をたてていて、従来の産業分類に疑問を持った。その理由は、産業の分類をするにしても、この地域の課

図表1 地域の立場からみた産業分類

出 稼 (でかせぎ)		生産	販売	消費	波及
	X	×	×	Δ	X
-{ 農 林 漁 業 (内需型)	Δ	O	0	0	0
-2 農 林 漁 業 (外販型)	Δ	0	×.	×	Δ
-1 農産物加工 (土産型)	0	0	0	×	0
-2 農産物加工 (外販型)	0	0	×	×	Δ
- 】 工業(原料立地型)	0	0	Δ	×	Δ
-2 工業(市場立地型)	Х	0	-0	Δ	O
-3 工業(労働力立地型)	0	0	Δ	Δ	O
-1 商 業 (卸売)	×	×	0	×	Δ
-2 商 業 (小売)	Х	×	0	0	Δ
-1 サービス業 (生活関連)	Δ	0	0	0	0
-2 サービス業 (観光関連)	0	0	0	0	0
-1 飲食業 (内部サ-t'2型)	Δ	0	0	0	0
-2 飲食業 (観光型)	0	0	0	0	0
-1 建設業 (一般土木型)	×	Δ	0	Δ	Δ
-2 建 設 業 (地元住宅型)	Δ	Ö	0	0	0

題がはっきりと出やすい方法がないのだろうか、ということであった。地域にとっての産業は、常に地域づくりにどれだけ役に立つか、ということぬきには考えられない。

そんなことから、「地域にとって都合のよい産業分類」 というものを考えた。それが図表1である。

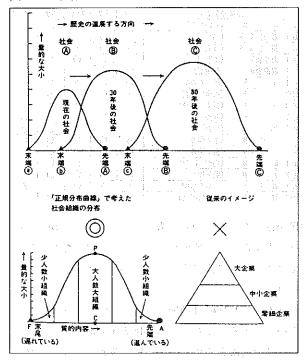
地域の所得を決めるのは、1、2次産業の振興だけでなく、「①地域が外部から獲得する外貨の量を増やすこと、②外貨を地域内部でぐるぐる回す回数を多くすること」である。これは、北海道一貧しい村として有名であった、人口3,000人の最北端の猿仏村を、10年後には高額納税者(1,000万円以上)が数十人になるという大事業を成功させた助役さんの言である。

この表の中で最も面白くないのが「出稼」産業で、○ 印の多い業種が「地域でぐるぐる」の意味をもっている。労働力立地型の工業は「ぐるぐる率」は高いと云えない。離島の漁業などで、水揚げした魚を大消費地の港に直接持っていってしまう場合は、「地域でぐるぐる」は全くない。これに比べてサービス業と飲食業(観光関連)は、最も「ぐるぐる率」が高いと考えられる。地域づくりについての土木や単一工業型発想だけでなく、地域の文化(伝統・歴史・食べものなど)を大切にするソフト産業への拡大も必要である。

●動的な産業構造モデルで考えてみる

テクノポリス計画の頃から"先端産業"という言葉が広く使われだしたのであるが、当時私は「先端産業を狭い範囲に決めつけるのはどうか…」といって、ある県庁の人にひどく軽蔑されたことがある。つまり「先端産業はIC産業のことで、21世紀の日本をきりひらく産業だが、これの誘致が地域の将来を決めるといわれているのに、その程度の勉強もしていないのか」とい

図2 産業構造モデル (飯沼和正氏提唱)



ったお貼りをうけたわけである。料は、単純し、

当時から「先端産業という産業はない。どんな産業 でも業種でも企業でも先端もあれば中間もある。それ はいつの時代でも常に入れ替わっているものだ」とい うことをある先生から常々教えていただいていた。

この問題は固定的に考えるのではなく、動的にうけ とめるべきことだと思うので、それにふさわしい産業 構造モデル(飯沼和正氏の提唱によるもの)で考えて みたい。図2に示すように歴史の進展の中で先頭に立つ 部隊は量的に少なく、量的に社会を支える部分は集団 単位も集団数も多くなると考えられる。この飯沼モデ ルで言うと、小組織創造活動セクターがその地域にふ さわしいだけ存在し、それが十分活動的である地域は、 将来が明るいと言ってよいことになる。

しかし、ある一時期に先端であっても何年か経つと もはや先端ではなくなる。つまりこの先端部分を常に

リニュアルするシステムのない地域は停滞するという ことでもある。その概念を示したのが図2である。

この図からも云えるように、地域の水先案内をする パイロット型産業は、小組織でピリリと辛い仕事がで きる、流動的な仕組みを持っていなければならない。

それに反して、地域の現在を養うための中心となる 産業は、大組織で効率追求型の合理的な組織となる。こ の分野が強いと日々の稼ぎよくなる。一方サポート型 産業は稼ぎとしてはそれほど効率的ではないが、地域 の暮らしやすさに結びつく。そういう方向を目指した 地域づくりもあってよいのではないかと思う。

●働く人が多い地域が、物質的には豊かになり、モ ノつくり関連産業が強くないと量は稼げない

ペティは「農業のより工業の方が利益が大きいし、さ らに進んで商業の方が利益が大きい」と述べたが、モノ つくりとその関連産業(建設、エネルギー、卸売など) の比重が大きい地域は、全体の就業者も多い。モノつ くり関連の全国平均は245人(人口1,000人中)だが、 福岡・佐賀は211人・241人とかなり多い。一方沖縄 はモノつくり関連に145人しか働いていない。その結 果人口1,000人中の就業者数は429人で、全国平均の 500人や福岡県の478人に比べて大幅に少ない。

表3や表紙に揚げた図を見ていただきたいのだが、地 域の就業者のうち、差がつくのはモノつくり型産業で ある。この部分の産業の厚さは、それ以前のフロント 型産業に従っているのだと思う。

こう書きながら思い出した本がある。それは「研究 開発のマネージメント (ハンス・マーク著)」である。 この著者はテキサス大学の総長で、大学経営のための トータルマネージメントを目的としてシステムづくり をした人でもある。その中に書かれていたのが「時代 を越えて広く受け入れられ、少なくとも部分的には正 しい仮説がある。その一つは、国による科学研究への 投資と国レベルの生産性との間には深い関係があると

表3 産業別従業者数(H8)

なび /主木//	114440						上段:	従業者数	(人) 下段	<u>::人口干/</u>	人当たり従刻	東者数 (人/	/千人)
	全国	関東	関西	九州・山口	山口県	福岡県	佐賀県	長崎県	熊本県	大分県	宮崎県	鹿児島県	沖縄渠
全産業	62,781,253	24,065,218	10,435,389	7,733,732	757,162	2,404,767	438,812	707,380	883,393	597,301	570,523	828,020	546,374
	500	519	506	476	487	487	496	458	475	485	, 485	461	429
フロント型・	13,656,693	5,711,062	2,147,056	1,550,436	142,018	499,463	80,584	143,038	168,532	118,408	105,532	154,977	137,884
産業	109	123	104	95	91	101	91	93	91	96	90	86	108
モノづくり型	30,772,187	11,287,641	5,021,586	3,438,511	366, 130	1,038,778	212,719	306,786	407,638	272,016	267,021	383,278	184,145
産業	245	2 44	243	212	235	211	241	199	219	221	227	214	1 4 5
生活サポート型	20,797,896	7,066,515	3,266,747	2,744,785	249,014	866,526	145,509	257,556	307,223	206,877	197,970	289,765	224, 345
産業	166	153	158	169	160	176	165	167	165	168	168	161	176
人口(平成7年)	125,570,246	46,333,727	20,627,039	16,252,768	1,555,543	4,933,393	884,316	1,544,934	1,859,793	1,231,306	1,175,819	1,794,224	1,273,440

いう考え方である。つまり科学が技術を生み、それが われわれの生活を豊かにしてくれるというのである。」 であった。

私が、ここでパイロット型産業というカテゴリーを 明示した産業分類をつくろうと思ったきっかけにもなった文言である。

●生活サポート型産業は、どこでも一定していて、 人口1,000人あたり160~170人程度である

この産業分類をつくってみて気がついたのは、「地域の暮らしを守るには一定の就業者がいるのだ」ということである。地域ごとに産業構造も違い、気候・風土も違うので、就業者の数にはひどくバラツキがある。にもかかわらず、サポート型産業として分類した部分にはそれほど差はなかった。

不思議に思うと同時に、この分類の必然性も感じられて安心もした。

考えてみれば当然のことでもある。小売業や飲食店 はどこでも変わらない。医療・保険なども変わらない。 地方公務員も同じぐらいの人数となる。これらの地域 のための就業者に差が出るはずもないのである。

以上新しい産業分類の考え方について述べた。結論は「どこの地域にも先端産業は必要であり、地域のパイロット役をする産業が必要だ」ということである。しかし、先端産業というのは、地域によって業種の違いはある。土地柄や、その土地の産業風土に合った、将来を見据えたパイロット役が必要だと思う。

直方の鉄工の歴史と今

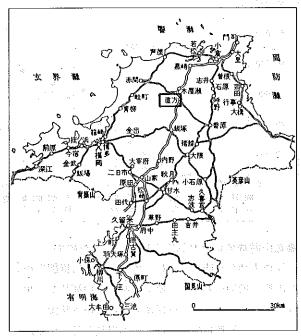
~ 筑豊三都物語・パート2~

福岡県の筑豊地域のことについては、これまでもいくつか書いてきたが、今回は、筑豊三都の中でも、唯一製造業の集積が高い直方の鉄工業の歴史と今について紹介したい。このきっかけは、飯塚にある研究開発センターの仕事を手伝っている時に、企業ヒヤリングを行ったことによるものである。

●遠賀川に由来する名称

「直方」は「のおがた」と読むが、この地名の由来は 諸説あるようである。南北朝時代に市の中央を流れる 遠賀川の東西に、足利尊氏が東側、懐良親王が西側に 対峙した時の川西側(昔からの市の中心街側)を天皇

直方の位置



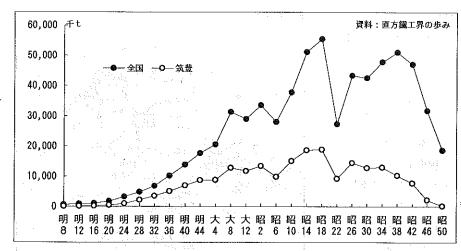
方・親王方、これを皇方・王方という呼び方が訛ったという説や、縄文時代には、この辺りは遠浅の入り江だったため、「ノオ潟」とでもいう呼び方があり、これに漢字を当てはめたのではないかなどの説もある。いずれも遠賀川の形成・存在に関わる地名と思われるが、この名称が世に出たのは、1625年黒田長政の死後、福岡藩が本藩と2つの支藩に分割され、四男高政がこの地を支藩として領し、東蓮寺藩(当時4万石)と称したのち、1675年に直方藩と改めたことに始まる。

●地の利がもたらした直方の繁栄

江戸時代、直方藩の城下町として形成された直方は、 直方藩の廃藩(1720年)により福岡藩に返還された後 の一時期、城下町としてのにぎわいが衰微する。しか し、月2回の市の開催や筑前六宿の形成などにより、直 方には遠賀川の水運とともに交通の要衝としての繁栄 がもたらされる。

また、1700年前後より、燃石として家庭用に利用されていた石炭は、その採掘量の増加とともに、瀬戸内沿岸地域をはじめとした海岸地域での製塩のための利用により、徐々に産業用としての石炭需要が増してくる。

1816年(文化13年)には、福岡藩による芦屋、若松への焚石会所設置、さらに1840年(天保10年)には直方に焚石丁場を設置、1844年頃、小倉藩が田川郡赤池町に会所を設置するなど、石炭取引の場が設置され、筑豊地域での石炭産地によるにぎわいが出現してくる。



明治以降の全国と筑豊の 出炭量の推移

- ・大正8年頃には全国出炭量の半分 近くを筑豊地域が占める
- ・その後、昭和30年までみても全国 出炭量の½~½を筑豊地域が占め ている

●鉱山解放令により石炭採掘ラッシュが始まる

江戸末期から明治にかけての製塩や蒸気機関等の石炭需要の増加に対して、明治初期に鉱山解放令が出され、だれでも申請すれば採掘できるという状況になったことで、筑豊地域において中小炭鉱が林立する。

しかし、当時の採掘方法は、人力で坑内の排水をしていたほどであり、直方の鉄工業も、明治10年頃までは、石炭のタヌキ堀りに使う「つるはし」「掻き板」などを修理、製作する鍛冶屋が2件ほどしかなかった。しかし、当時の筑豊の炭鉱数は既に数百に達しており、直方を含む鞍手郡全体で72坑ほどあったと言われ、採掘の道具を製造する鉄工業の需要はこのあたりから始まったと言える。

●明治12年に最初の鉄工場が成立

明治12年、2件しかなかったと言われる鍛冶屋に加え、直方に初めての鉄工場が誕生する。最初に設立された加藤鉄工場を皮切りに、明治20年から30年にかけて次々と工場が設立され、石炭採掘の機械化がその大きな要因であり、採掘の需要は、当時の殖産興業によるものであり、この後、昭和30年代の石炭合理化の時まで、石炭は黒ダイヤと呼ばれる時代を迎えることになる。

●採掘量の伸びを支えた排水ポンプの成功

しかし、中小炭鉱の人力による採掘方法では、なかなか出炭量が増えず、とくに坑内で出水すれば、そこをあきらめて次を探すというような状況であった。

そこで、長崎で造船技師としての経験を持つ片山逸 太氏は、明治8年に蒸気船の汽缶をヒントに機械排水を 試したがこの時は失敗している。しかし、この実験現 場(田川郡糸田町)には、当時の炭鉱主の大勢が集ま ったと言われ、当時の石炭採掘現場で「排水をどうするか」という問題がいかに重要であったかがうかがえる話である。

この蒸気汽缶による機械排水実験から6年後の明治 14年、これに成功したのは、片山氏と同じく長崎で機 械技術を学んできた杉山徳三郎氏であり、現場は古河 目尾(しゃかのお)炭鉱(飯塚市内)であった。

この成功によって、坑内排水の機械化問題は一応の解決をみることとなり、その後の出炭量も順調に伸びていく。

●鉄工場が次々と誕生

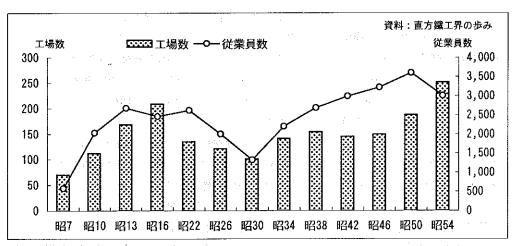
坑内排水へ蒸気機関が多用されるようになったことで、石炭の捲揚機、運搬トロッコ、軌道など、炭鉱に 関連する機械の導入を促進するきっかけとなり、さら に機械の製造だけでなく、修理、部品交換など炭鉱近 辺での多くの鉄工場の需要を生みだし、直方の鉄工業 は大いに刺激を受け、数多くの鉄工場が生み出されて いく。

当時の機械製造のノウハウは、国内産ではなく、外国の知識を取得した多くの人物によってもたらされている。とくに、江戸幕府が設置した長崎製鉄所におけるオランダの機械製作の技術などは、筑豊炭田の産炭技術に多いに活用されている。

●北九州の製鉄と筑豊の石炭、そして直方の鉄工

この筑豊地域の石炭産業の隆盛をさらに加速したのは、製鉄業の立地であった。

明治時代の鉄鋼生産は、そのほとんどを国外からの輸入に頼っていたが、日清戦争後、国産の鉄鋼生産を目指した政府は、明治30年に福岡県八幡村に官営八幡製鉄所の設置を決定した。



直方の鉄工場の推移

その立地要因としては、鉄鋼生産に不可欠だった石 炭の供給地として筑豊炭田を背後に控えていることは よく知られている。逆に鉄鋼の生産地が直方に近接し たことで、炭鉱用機械製造の原料の調達も、この地が 優位になったと言えよう。

この後明治37年に日露戦争が起き、石炭と鉄鋼の需要により、筑豊地域は空前の活況を呈することになる。 当時筑豊地域では、「5円(現在の一万円以上の価値)以下のお金は無い」とまで言われ、炭鉱成金にあやかった「成金饅頭」(直方)というお菓子まで売り出されるほどであった。

これにより、直方の鉄工業界も数千人の従業者を抱 えるほどになり、大阪方面からも人を雇い入れるほど であった。

その後、明治40年に電力を供給する「直方電気株式会社」が設立され、直方の町に営業用電力による電燈が初めてともると同時に、鉄工場の明かりも電気を使い、大正3年には、動力用電力の供給(九州水力電気株式会社による)が始まり、鉄工場に動力線が引かれるなど、工場の生産力も飛躍的に上昇した。

これより、第二次大戦に到るまで、直方の鉄工業は、 炭鉱用機械を中心として、軍需品なども手がけ、第二 次大戦を迎えることになる。

●戦後の復興

大戦後、傾斜生産方式により石炭産業の復興が行われ、生産性の向上、合理化が進められるが、この時、生産効率の争いの中、各炭鉱が抱えるポンプの性能がそれを左右するといわれ、ポンプ製造技術の研究をはじめとした鉱山機械の試験研究機関として「福岡県直方鉱業試験場」が昭和29年に設置されている(この試験

場は昭和55年に北九州の県立工業試験場と統合され、 閉鎖された)。

しかし、昭和30年の石炭合理化政策の開始により、 鉄工業界の主たる需要家であった炭鉱の閉山が急激に 進みはじめ、直方のポンプ機械生産は、農業、水道、船 舶等に使われるポンプの製品製造へと転換することと なる。

この間の鉄工業の需要家の転換は劇的なものであり、 昭和34年と昭和39年の生産量は、鉄工組合の資料に よると次のとおりである。

	昭和34年	昭和39年
炭鉱機器	58%	24%
一般産業機械	31%	67%
その他	11%	9%

また、新たな産業誘致、雇用の確保、さらに中小企業の技術高度化、設備の近代化を目的として、市内に工業団地が設置され、石炭に依存してきた産業構造の転換が図られた。

さらに、昭和40年代には、化学工業、石油工業、建設などに使われるポンプの製造などへと、基幹的な技術を生かしながら、市場開拓を行うこととなった。

●オンリーワンへ

炭鉱用機械から一般機械、そして精密機械部品、金型製造など、精度の要求される機械製造へと直方の鉄工業は転換してきている。とくに、鍛造品では、世界的な技術水準を持つ企業も少なくなく、大手の造船メーカー、機械メーカーからの受注が継続されている企業もある。

一つ例をあげたい。S鉄工所は、大正初期に設立された鍛造品製造一筋の企業である。戦前までは、鉱山用

機械を中心として船舶用機械なども手がけていた。

昭和30年代の石炭合理化に伴って、一般機械の製造を始め、近代化の為、大型機械部品製造のための1000tプレスを導入した。さらに昭和60年代にはより精密な鍛造品製造を目指して、2500φのローリングミルの導入、さらに平成になって、オールコンピューター制御による1500t油圧鍛造プレス機器を導入し、その鍛造品の精密度においては、世界的な水準を維持している。とくに大型シャフトの信頼性は高く評価されており、海外からの発注だけでなく、技術提携、資本提携の申し込みも多いようである。従業員は、40人足らずであるが、鍛造技術は、一人前になるには最低10年はかかると言われており、技術の維持、人材育成を重視している企業であり、近年の単価の切り下げに対しても容易に屈しないだけの技術力を持っている。

この他にも、一般産業機械に転換した際に、特殊な技術を獲得し、これを基礎として展開している企業もあり、オンリーワンの技術を有する企業しか今後は生き残れないと強く感じた次第である。 (山辺 真一)

大宰府の街歩きへどうぞ

地域資源を楽しむまちづくりへ

大宰府のまちでは、先日、九州国立博物館の建設計画が文化庁により決定された。当事務所では以前から博物館と地域の係わりについて関心をもってきたのだ

が、福岡都市圏内にある大宰府については、身近な地域だけに特に関心のあるところである。

わが国で4つ目となる国立博物館の設置に向け、単体としての博物館の魅力だけでなく周辺地域の魅力をも増やせないかと考えている。今回はそうした想いから、大宰府についていろいろ考えてみたい。

●歩くための地図というガイド本をみて

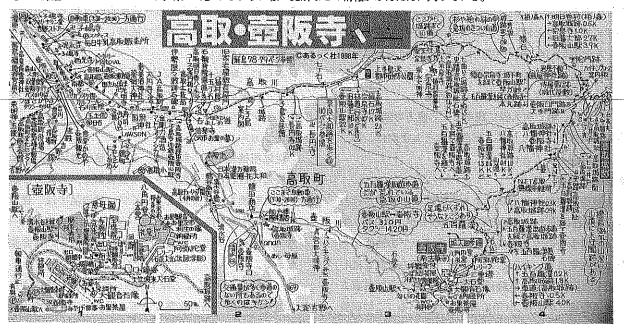
『山と渓谷社』という山歩き情報の出版社が『歩く地図』という観光地のガイド本を出している。同じガイド本でも、主要な観光地・見どころがピックアップされた『るるぶ』とは少し違う。

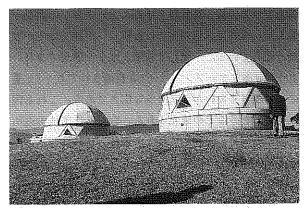
みやげ屋、飲食店、社寺・仏閣、古墳、美術館・博物館、トイレ、駐車場、バス停、道のサイン、通りの名称など生の情報が詳細に書き込まれている。歩く人が距離感を誤らないよう全ての地図にスケールが載っていて、取り外しできるなど、初めて使う人でも分かりやすく、なかなか便利な地図である。

山歩きという何がしかを手がかりにルートを開いていく遊びに関連した出版社が出すから、というわけでもないと思うが、ちょっとした歩行者空間の変化や目印などに関しても気配りがなされている。

私もこの地図を使っていろいろな街を歩いてみたのだが、使ってみて改めて思うのは、結局、人が動いて回るということは、何か感動できそうな要素が期待できそうだという目的性によるものだという至極当たり前のことである。

「歩く地図」のある1ページから。楽しく歩けるように桜の見所などの情報がふんだんに入っている。





須玖岡本遺跡群の甕棺遺構 遺跡の丘の公園の中にあり、ドーム型の覆屋が被せられて いる。

●太宰府天満宮周辺は40分間のまち?

3~4年前のことだが、観光地としての大宰府について、旅行代理店の商品企画の担当者数人に話を聞く機会があったが、次のような意見であった。

- ○関東や関西からの九州ツアーの場合、1県内だけ動き 回ることはあまりしない。福岡空港で降りて福岡を バスや鉄道で2~3県をハシゴするコースが多い。結 局、福岡は九州の入口・出口を押さえている。
- ○そうした場合、福岡に着いたお客、または福岡から帰る間際のお客の、次の移動までの時間調整として大宰府はちょうどよい(1時間くらいつぶせる)。
- ○どのツアーでも大宰府の滞在時間は大体40分位となっていて、貸し切りバスで乗り付けて、参道を登って参拝し、帰りに梅ヶ枝餅を食べたらちょうど良い時間になる。
- ○大宰府の知名度は一応全国区であるが、太宰府天満宮のイメージが強い。菅公=受験の神様という宣伝がうまくいきすぎたため、受験生が全国的に減少した場合はどうなるのだろうか。

実際には太宰府天満宮では年間を通して様々な行事が行われており、県内からのお客さんも集まっていると思うのだが、長年、福岡に住んでいる人でさえ、大宰府=太宰府天満宮としか思っていない人は案外多いのではないだろうか。

ところが、地元の人と話していると、自分達の住む 地域を「天満宮のまち」(観光客が多く集まる場所とし て)と「大宰府のまち」(大宰府政庁跡をはじめ国の指 定史跡地域が分布する場所)と2つに分けて、同じよう に地域の財産とみているようである。



五郎山公園 奥のしげみが古墳の丘なのだが、むしろ、前面のオープンス ペースは住宅地に面しており、こちらの方が目立つ。

●史跡や遺構が多数共存してきた筑紫地域

ここで大宰府のある筑紫地域について触れてみたい。 この地域は、古くは日本の古代史の中でも比較的早い 時期に稲作や金属器を用いる集落社会を発展させた歴 史をもつ。この地域で学術上貴重とされる古墳や遺跡・ 遺構が多数みられるのはこのためである。

現在は太宰府市、大野城市、春日市、筑紫野市、那 珂川町などの市町で構成されているが、道路、鉄道な ど交通至便であるため、この30~40年間は戦後の福岡 都市圏の拡大に伴い人口が急増した地域でもある。

例えば、大正9年には人口2千人程度の田園地帯だった春日市や大野城市は、戦時中の軍工場疎開などの開発がきっかけとなり、戦後はそのまま住宅都市として発展した。

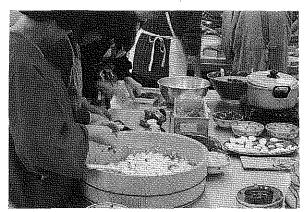
「都市計画基礎調査」によって、これらの市町における昭和45~平成7年の25年間の人口の動きをみると、現在の字番地で人口が5倍以上に増えたところが数多くみられる。

筑紫地域では、住宅開発の造成の最中に発見された 遺跡や遺構の中で、貴重なものと判明して保存された もの、あるいは記録後に損壊されたものが数多くある。 この地域では過去30~40年の間、歴史的資源の保存

25年間に人口が5倍以上になった町丁数 (1995年時点で人口1千人以上)

筑紫野市	7
春日市	9
大野城市	1 6
那珂川町	1 0
宇美町	. 3

※)上記表では、番地数を数カ所に区分してあるものは 1ヶ所としてみている。



太宰府市文化ふれあい館での、万葉風料理の教室。いろい ろな世代の女性が熱心に郷土料理を覚えようとしておられ ました。

という課題と、住宅都市としての開発という課題に、同 時に取り組んできた歴史がある。

太宰府町(市制前の)の「太宰府町総合計画」(昭和47年策定)の策定作業の資料をみても、当時、都市の将来像を決める段階で「文化史跡と自然景観の開発と保存の問題」が以下のように取りあげられており、当時の地域住民の想いが複雑であった様子がわかる。

- 一「近代都市の造形のために、自然と歴史の保存が障害となっている例は多い。何時いかなる場合にも、保存が開発に優先すると主張するものではない。対象の貴重性、住民の愛着度等を考えながら、開発が自然を損なわず、かえってこれを生きかえらせる方法で進められなければならない。」
- ●開発地の史跡・遺構は今はどのようになっているか 筑紫地域の史跡や遺構が、今の地域社会にどのよう に係わっているのか興味があったのでいくつか代表的 なものを調べてみた。

例えば、先日、巴形銅器の鋳型片が近くから出土した「須玖岡本遺跡群」(春日市)は、発見された時期は明治32年と古く、過去100年近くにわたり、甕棺、前漢鏡、ガラス製の壁、壁、銅剣などの発見をもたらした。立地環境としては、近接した住宅団地に戸建て住宅が密集しており、これだけ近くに人が住んでいると、遺跡のもつ歴史性うんぬんよりも、遺跡周囲で整備された公園の開放性、あるいは併設して新設された文化交流施設の方が、地域の人にとって、ありがたいものになっているのかもしれない。

また、同じく国指定の史跡になっている装飾古墳「五郎山古墳」(筑紫野市) は、発見された時期が昭和22年。

周辺ではその後、筑紫野・小郡ニュータウンの開発が進んだ。現在は古墳の前には真新しい戸建て住宅が整然と並んでいる。一見して古墳とは全く連想できないような立派なオープンスペースが整備されてあって、夏には盆踊りくらいが出来そうな広さである。これも国の史跡であることの威光よりも、むしろ住宅地の近所にある公園として親しまれているかもしれない。

●太宰府市は国の特別史跡地として公有化を目指す こうした中で太宰府市の場合は事情が異なっている。 水城や大野城、大宰府政庁跡など、スケールの大き な史跡・遺構が数多く分布し、毎年大晦日にNHKの「行 く年来る年」で紹介される観世音寺の鐘など、知名度 では全国区というものもある。

全市のうち447haは、国の「特別史跡地」の指定を受けており、このうち265haが土地公有化(民地の買い取り)の対象となっている。昭和43年に始まった公有化は平成9年度末までに44%を超えた。

長期的には公有化対象地の全域を買い取ったのち、昭和47年に国の指定を受けた時点に位置づけられた「歴史公園整備構想」が進められる予定となっているが、ずいぶん先の長い話である。

特別史跡地の指定を受けて以来、新規開発は抑制されたかたちになっており(市街化調整区域ということもあるが)、公有化された土地の中には農地も多くみられるため、緑が多くくつろぐ場所として日常の散歩コースとして地域の人に親しまれている場所は多い。

最近になって、これらの史跡地を当面活用していく 方針について、市に動きを求める市民の意見もみられ るようになった。ボランティアによる史跡解説などの ほか、万葉の料理の復元を行っている女性グループな どもあって、いろいろ地域のもつ歴史性などを生かし て楽しんでいる人は既にいる。

●伝説的な話、語り継がれる話から拾ってみよう

いつぞやか太宰府天満宮の近くにある「九州歴史資料館」(県の施設、大宰府政庁の発掘・調査はこの資料館が行っている)に行ったとき、展示パネルに「中世において、既に太宰府は伝説的な存在になっていた……」というくだりを見かけたが、とにかく重要な史跡がある……という話だけはずいぶん昔から地元で語りつがれているようだ。

土中から露出した史跡や出土品を見て楽しみを感じるには、やはりこうした伝説や語り継がれるお話がく

っついてこそ、いろいろイメージで遊べるきっかけと なるものだ。また、お勉強だけでなく、歩いて頭も体 も舌も堪能できるいろいろ楽しめる要素が加われば、内 外の人の楽しみの多い地域になるように思う。

国が重要とする史跡のモノの価値だけでなく、お話など無形の楽しみ、地域ならではのもてなしなどで楽しみを与えることが当面の方策ではないかと思う。

こうした天満宮だけでない太宰府の楽しみ方を地元 の人の取り組みで広げていって欲しいものだ。

●私の大宰府のおすすめ

最後に私個人の「大宰府のおすすめ」というものを並べてみた。なにぶん天満宮のまちが短時間滞在となっている以上、来た人に大宰府のまちを楽しんでもらい長くゆっくりと楽しんでもらいたいと思うのである。いずれは「歩く地図」になるくらいに、様々な要素を増やしていければと思う。

①筑紫地域の史跡地を上から眺めてみる。

筑紫地域は周囲を小高い山で囲まれており、要所となる山には土塁や城の跡がそのまま残っている。上から眺めると水城跡などが一望でき、当時の日本の防衛上この地がいかに重視されていたかが分かる。(四王寺山、住宅団地の上の展望台などから)

②住宅地の中で、お茶・お菓子でもてなすお店に入っ てみる

天満宮の参道で昔から餅菓子を製造・販売している お菓屋さんの兄弟分のような菓子工場が、住宅地の中 にあって、来客には玄関先を開放しお茶とお菓子をふ るまっている。生菓子を買うこともできる。

③史跡地内の雰囲気を生かした料理屋に入ってみる。

私も実際に入ってみるまでいろいろ謎の多いお店であったが、五菜の粥、赤米のおこわ、など万葉の食をテーマとした静かなたたずまいのこだわりの店であった。

④赤米や万葉の野菜、花を植えた菜園を見学。

地元の女性達が取り組んでいる活動で、九州大学の 先生などの協力もあって、昔の品種に近い苗などを観 世音寺近くの農園で育てている。万葉の食事の復元を やっているグループもあって、地元の親しい方にたの めば食べさせてもらえるかも。

⑤国指定の様々な史跡・仏閣などを訪れてみる。

水城などは遠望する人はいても間近に見る人は少ない。 意外に複雑な工法で建設してあり、当時の土木工 学的な技術の高さがしのばれる(土木専門の大学の先生による)。その他、太宰府政庁跡には礎石が復元されており、いろいろ創造力をかきたてられる。たまに勢いよく乗ると変わった音のする石もあって楽しい。

昭和43年頃から本格的にスタートした発掘調査の結果、復元した出土品や太宰府の歴史などについて親切に教えてくれる職員がいる。

以上ご紹介したこと以外にも今後情報があれば盛り込んで、将来は「歩く地図」になるくらいのものになれば……と思う。もし大宰府に行く予定のある方は、足をのばしてみて下さい。現在はほとんど散歩に適していること以外に楽しみは少ないと思いますが、興味のある方はおしらせ下さい。 (尾崎 正利)

太宰府の商店街が変わりつつある

先日、大宰府天満宮の参道に立ち並ぶ商店街を歩いていて気がついたことがある。

もともと、この商店街は観光客相手が100%で、一般の市民が寄り付くところではなかったはずであるが、 観光客相手ではない店が現れていたのである。「これは どういうことなのだろう」と思いながら、しばらく佇んだ。

大宰府の観光店舗について、一寸聞いたことと、少 し商業統計を覗いただけの知識で整理してみる。

- ○土産物店(参道) 125 軒
- ○年間のピーク 正月3カ月
 - ・1~3月で年間売上げの7割ぐらい
 - ・センター試験の関係で普段より1、2月が増えた。



ケーキやオルゴールと喫茶をセットに、修学旅行生や近所の 若い層を集めている

- ○土産物といっても、土地の産物ではなく、土産物 産業の製品である。
- ○昔は参道を歩くと、両側から声がかかり、強引に 店に誘って梅ヶ枝餅を売るようなことがあったが、 最近の売り方は変わってきている。
 - ○みやげ品販売 (太宰府市)

the second	商店数	販売額(万円)
昭和60年	22	39, 069
〃 63年	24	55, 801
平成3年	30	78, 698
〃 6年	24	61, 845

○太宰府市の人口

大正7年	7,190人
昭和10年	8, 118
″ 22年	11, 532
〃 35年	13, 913
平成7年	64, 913

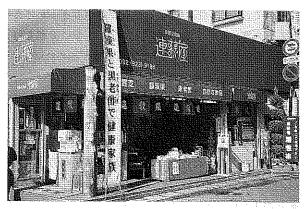
みやげ品販売の数字を見ながら、気になったことがある。平成3年が急増しているので、「これはバブルのせいかな」と思いそうだが、私は違った感想をもった。それは「第2次ベビーブーム世代のためかな」ということである。これを確かめる方法はないが、ここのみやげ品でバブル的に買い手がつくようなものはない。とすると、平成2・3年・4年頃が受験期となった2BB世代の購買力とみる方が納得しやすい。

この2~3年は、次の3BBの生まれる時に当たっているが、一向にその現象は現れていない。もうベビーブームという山は消えてしまっているのである。

〈今後の店づくりは?〉

市の人口を並べて置いたが、戦前7~8千人であったということは、おそらくその世帯数は2,000ぐらいである。現在の世帯数は22,000ぐらいだから、戦前からこの地に居住しつづけている人たちは10%ぐらいと見なければならない。また、もともと太宰府の土産品商店街は、地元の人たちとのかかわりはなかったと云われているが、太宰府に住んでいる人たちの90%は、福岡都市圏の普通の都市住民である。今まで商店街と地域に住む人たちがお互いに横を向いてこの土地に住みついてきている。それを可能にしたのは「日本の受験戦争による天神さんだのみ」であった。受験戦争は終わった。

この文の冒頭に「商店街を歩いて気がついた」と書



健康ブームをあてにした新しいタイプの店

いた。それは、観光客対象でない、大ベットタウン (この周辺の都市を合わせると20~30万人になる)の都市住住民、特に若い都市住民を相手にした店が出だしていることである。表通りではないが、山菜料理の店が出ており、近郊の主婦層のサロンと化していた。

すでに始まってはいるが、2010年頃に、日本は大変 化を起こすとみられる。農業・商業とも後継ぎ問題。住 宅は余る時代になる。観光の好みはすでに変わりつつ ある。

みやげ品商店街も、周辺地域の若い人、中高年の都 市住民の好みに合わせて、利用していただくようにな らなければならないのではないか。 (糸乘 貞喜)

高齢者のための住まいを考える

~ 高齢者向け優良賃貸住宅セミナー ~

民間の賃貸住宅では高齢者の入居は敬遠されることが少なからずある。その理由として「病気や事故にあう不安が大きい」「家賃の支払いは大丈夫か」「高齢者が安心して住める住宅ではない」といった家主側の思惑があり、実際にひとり暮らしの高齢者の入居を断る家主は約5割(東京都「高齢者等の住宅市場実態調査」H4)いるようだ。公営住宅としてはシルバーハウジング等の制度もできているが、民間の高齢者向けの賃貸住宅供給を進めるため、「高齢者向け優良賃貸住宅制度」が平成10年4月にできた。そこで今回、福岡県住宅課の相田氏に新しい制度について、また民間で独自に高齢者のための住宅を作っておられるハーモニー協議会の花田氏に実際の問題等について話していただき、高齢者を対象とした民間賃貸住宅についてのセミナーを行った。

●高齢者向け優良賃貸住宅制度の概要

- ・入居対象は60歳以上の単身及び夫婦等の世帯で、入 居時に自立した生活が営めること。収入分位は公営 住宅と同じく25%以下(知事裁量で40%まで可)。
- ・民間の土地所有者による供給を原則とし、住都公団、 地方住宅供給公社による供給もできる。
- ・管理の受託・借り上げを地方公共団体、公団、公社、 3セク、一定の民間法人などが行う。
- ・新築のほか、既存住宅の改良でも良い。
- ・戸数は5戸以上、戸当たり床面積25㎡以上、耐火又は準耐火構造で、長屋建て又は共同建てとする。
- ・住戸及び共用部分は「長寿社会対応住宅設計指針」に 基づくバリアフリー仕様とし、緊急通報システムの 設置が義務づけられる。
- ・民間建設の場合、共用部分、共同施設、高齢者向け 設備等の整備費に2/3補助がつく。既存住宅の改良 も同様。
- ・家賃対策として、収入・住戸規模・立地条件などから設定される応能応益家賃と市場家賃との差額の1/ 2が国と地方公共団体から補助される。
- ・家賃の支払いは月払い、一時払い、及びその併用方 式ができる。

●緊急通報以上の魅力的なオプションが必要 高齢者向けの賃貸住宅について、講師及び参加者か ら意見が出されたのを以下に紹介する。

- ・高齢者向け優良賃貸住宅(以下「高優賃」) は最低ラインの設備として緊急通報システムを義務づけているが、それだけでは入居希望者にとって十分な魅力になり得ない。入居者を確保していくためにはどんなオプションを付けて魅力を高めていくか考える必要がある。デイサービスの併設、食事サービス付きなど。
- ・緊急時に助かるための装置はナースコールのような もの。常時身につけている方が良く、壁に付けてお くのは効果的かどうか。生活感知センサーなどは緊 急時のためではなく、遺体が損壊しないためのもの ととらえるべき。
- ・高優賃はケアハウスの民間版という感じだが、ケア ハウスほどのサービスはなく、ケアなしハウスとい えるのではないか。
- ・福祉法人などで土地を持っているところが、サービ スの提供とセットにして高優賃を供給する可能性が

ある。

・既存の賃貸住宅で、入居している高齢者が家主と話 し合って改良して高優賃にする、というケースが考 えられる。

●在宅介護を進める上での住宅と福祉の境目は

その他、疑問点として残る点がいくつかある。例えば、入居条件として自立した生活を営めることとなっており、在宅サービスを受けている人は対象外になることだ。介護等を受けやすいようにリフォームするとしても、借家では難しいだろうし、持家でもあとを継ぐ人がいなければそんなに金をつぎ込んだりしないだろう。特別養護老人ホーム等の施設は順番待ち何年といった地域も増えている中、緊急に高齢者向け住宅を必要とするのはそういった在宅のサービスを受けている人たちなのではないだろうか。住宅政策と福祉政策の連携といいながら、在宅サービスを受け、自立生活が怪しくなったとたん住む場所の選択肢は狭くなる。高優賃やシルバーハウジングに入居した人がその後福祉サービスを受けるのは問題ないのだが、困った状態になる前に入居して下さいという点が難しい。

このあたりが住宅部局と福祉部局(あるいは建設省 と厚生省)の境目でお互い踏み込みにくいところなの だとは思うが、福祉を在宅介護中心にするならば政策 としてはいずれ連続して欲しい。それとも境目で困る 人なんてそんなにいないということなのだろうか。

高優賃の供給の中では対応できない問題かも知れないが、今後の検討課題という意味で挙げておきたい。

(母藤 聡)

自然の恵みは豊かだったが、火事もあり、 病気もあり、そして夢もあった

~ 59 回地域ゼミ ~

前号の書評で紹介した「山羊と暮らした」の筆者、重 松博昭さんをお呼びし、当所にて地域ゼミを開催した。

参加者は新規農業就業者2名を含め、それぞれ田舎暮らしへの強い思いを持っており、にぎやかなゼミとなった。

重松さんの話で特に印象に残っていることを簡単に 以下に述べる。

●田舎暮らしをはじめたきっかけ

・大学に入った途端に、勉強をする気がなくなり、大

学を中退した。

- ・その時、自分のまわりでつくられたものがどうやってつくられているのか、自分達がだしたゴミはどこへ行っているのかさっぱりわからないことに疑問を持ち、「ただ生きる」ということがわかりにくい世界だと思った。
- ・自分が食べているものはいったい何でできているのかなどを明確にし、あくせく働かずに自分が食べる物だけを作って、自分の体で全力で生きたいと思った。
- ・いちばん楽な生活は山羊の乳を主食にすることだったが、残念ながら胃腸にあわなかった。そこで素人 農業をやろうと思った。
- ・金を稼がなくてもすむように、金を使わないようにした。

●何とか家をたて、自然の恵みで生活した。

- ・山から松を切り出して、皮をむいて直接地面に埋め 込んで柱をつくり、窓は廃校からもらい、畳、五右 衛門風呂の浴槽は古道具屋さんから購入し、家を建 てた。古道具をつかったことは、リサイクルのはし りだったのではないか。
- ・屋根用のトタンは新たに購入したが、トタン屋根の 波が雨降りの日に果たす役割を知らずに反対方向に 付け、雨の日ひどい雨漏りにあった。
- ・風呂を買った古道具屋さんが、その後、師となった。 この古道具屋さんの手伝いをして、お金のかわりに 道具をもらい、身の回りのものはほとんどそろった。
- ・春は山菜があり、秋はあけび、冬は辛子菜があった というように、自然の幸に恵まれ、食べ物には困ら なかった。また、米は近所の人の米をつくる手伝い をしてもらい、パンはつくったり、パンやさんに、よ もぎを配達するかわりにもらったりした。
- ●家が燃え、病気になり、人のありがたさが身に沁 みた
- ・田舎ぐらしを始めて7年目の秋にかんなくずに火が付き、あっという間に家が燃えてしまった。後に残ったのは身につけている服だけだった。この時はじめて、田舎暮らしをなめていたと実感した。
- ・次の日の朝、知人が色々な生活道具を持ってきてくれた。それらは今まで持っていたものより、よい品だった。また、姉、友人が来て、新しい山小屋を1週間で建ててくれた。

- ・家が燃えた翌年、3番目の子供が生まれ、その数日後、 妻は高熱がでて、ごはんも食べられなくなった。「肺 血漿」になり、「急性腎炎」にかかった。やがて全身 の感染症になり、医師にも十中八九だめだと言われ た。
- ・その間友人が泊まりがけでやってきてくれた。
- ・やがて、妻の容態はよくなり、それまで、自分一人 の力で生きると思っていた目標が変わった。結局、自 分で豊かな生活が送れていると思っていたことは、友 人達の力添えがあったからできたことだった。

●これからの生活と夢について

- ・今は、子供たちの教育費がいるので、にわとりを300 羽飼って、卵で現金収入を得ている。
- ・にわとりの飼う量が増えると、海外から輸入したとうもろこしの粉などを混ぜなくてはならず、サイクルがくずれるので、子供達が大学を卒業し、教育費がいらなくなったらまた、にわとりを100羽に減らして、ゆったりと暮らしたい。
- ・また、将来できるかわからないが、偏差値教育では なく、子供1人1人の適正を見いだせるような学校を つくりたい。

重松さんの話のあと、「山羊はどこで購入できるのか?」といった具体的な質問から、「これからは自分の食べる分は自分で確保しなくてはいけない」とか、「私も田舎で暮らしたい」など様々な意見がでた。

重松さんに持ってきていただいた純地酒?も混じって会が終わる頃には皆ほろ酔い気分で、幸せいっぱいの様子だった。私もほろ酔い気分になりながら、以前訪れた、山田市の重松さん住む家を思い浮かべていた。決して豪華な家ではないけれど、甘酸っぱく、いい香りのする純地酒がたくさん入った瓶があり、窓からは緑が溢れ、そして今では自分のやりたいことに向かってしっかりと歩み始めている子供達が育った家には豊かさが溢れていると思った。 (七搦 かおり)

観光振興にシンクタンクは どう関わるか?

~第15回地方シンクタンク合同研修会~

さる平成10年11月27日(金)北九州市にて地方シンクタンク協議会第15回合同研修会が開催され、今年は「観光と都市」というテーマで進められた。

●門司港レトロ地区見学

都市型観光エリアの事例として門司港レトロ地区の見学があった。

北九州市門司港地区は、明治中期から昭和初期にかけて、大陸貿易の拠点として、また九州の鉄道の拠点として、また九州の鉄道の拠点として栄えていた。しかし、関門トンネルの開通で鉄道、船舶の結節点としての役目は無くなり、通過点と変わっていった。この地区にはかつて繁栄していた頃の洋風建築物が多く残っていたが、なかには窓を塞ぎ倉庫に利用するなど、みすぼらしいものもあった。

しかし、門司港地区の繁栄の様子を今に伝える歴史 的建造物を中心に、遊歩道等の整備が約300億円を投 じて整備され、観光客数も年々増加し、平成9年度には 約150万人が訪れるまでになった。

門司港地区の歴史的建造物や物産展、海辺などを散策しても、滞在時間はせいぜい1~1.5時間(北九州観光協会)とされているが、最近になって対岸の下関市と連携し「関門海峡」という広いエリアで捉え、滞在型の観光拠点としての整備を図っている。

●門司港レトロ地区事業とシンクタンクの関わりに ついて

私の参加した第3分科会のテーマは「観光振興とシンクタンク」で、メンバーは全国から集まったシンクタンクの面々約30人だった。

観光を地域振興策として打ち出している自治体が多いなか、地方シンクタンクの観光振興への関わり方について話し合った。

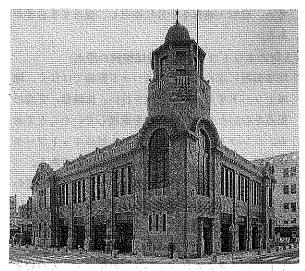
当分科会では最初に門司港レトロ地区事業のシンク タンクの関わり方について、(財) 北九州都市協会から の報告があった。

〈レトロ事業にシンクタンクがどう関わったか。〉

- ・本来、シンクタンクが本領を発揮するべき段階、構 想策定やその前段階において、全て市内部で実施さ れている。
- ・その後の段階においても総合的な政策提言や計画立 案を組織的に行った機関はない。

〈シンクタンクが関わる場合、何がポイントか。〉

- ・タイミングが最も重要。計画が熟してから、提言が 行われても反映させることが困難である。
- ・地方における機関、人材の不足も大きな問題として 挙げられる。特に観光等の特定分野を専門とし、か つ土地感を持った人材を地方部で獲得、育成するこ



旧大阪商船 八角形の塔が美しい

とは困難な面が多い。

報告の資料を見て印象的だったのは、計画の初期段階では地元の企業(シンクタンクではない)が参画していたが、計画が進むにつれ東京や、外国の企業に変わっている点だった。地元には適当な人材がいなかったということなのだろうか。

●第3分科会参加者からの意見 「智・神・神・神神・

〈地域づくりは住民なしでは始まらない〉

- ・観光振興に係わる行政やシンクタンクが十分提言したとしても、観光に係わる住民の意見がかみ合わず、 うまくいかなかった事例を紹介する。
- ・栃木県内の観光客数が伸び悩む、ある温泉地の観光 振興プロジェクトを企画している。その地域の温泉 旅館は温泉、美味しい食事、みやげ物などあらゆる ものを旅館内に抱え込んでおり、宿泊客が旅館外の 地元の飲食店やみやげ物店でお金をおとすことが少 なくなっている。しかし、これらの地元の店は宿泊 客がいなければやっていけない状態にある。旅館と 地元の店の双方の利害関係が絡み合って、観光振興 を進めようにも意見がまとまらず、うまくいってい ない。シンクタンクの協議ではうまくいかない。

〈財政負担の少ない振興策を〉

・厳しい財政状況の中で、自治体は失敗を許されない 地域振興として観光を位置づけている。計画策定の 場合、観光地(施設)の計画は重要であるが、自治 体財政も含めた多方面にわたる市場調査、及び計画 段階における住民への情報公開(場合によっては住 民加)が必要になる。さらに自治体の将来の負担を 考え、経営・運営を十分に検討し、提言する必要が ある。

〈人材のネットワークこそ地域振興の原点〉

- ・地域振興に求められるのはハード整備ではなく、地域をリードする人材の発掘を行い、体験型、交流に重点をおいたソフトづくりを重視していくことである。シンクタンクは、そうした人材のネットワーク化を図っていく中心的な役割を担うべきである。
- ・熊本県では、今後の地域振興は観光しかないと言われている。しかし、観光振興に対する住民の意識は 希薄だ。行政やシンクタンクだけによらず総合的な 観光戦略が必要だと思われる。「県民総エージェン ト」という考えを持っている。県民一人一人が観光 振興を手助けする人材であり、キーマンを見つけだ し、ネットワークを結ぶという総合的な取り組みが 必要ではないか。

〈地域の将来を見極めることが重要〉

- ・それぞれの自治体が何でメシをくっていくか、見極めが大事である。観光でメシをくうなら、交流、それに交流を生み出す核が大事。これがないと観光による地域振興は始まらない。人に来てもらう仕掛づくり、魅力づくりが必要。
- ・観光は裾野が広い。どんなことでもアイデア次第で 観光に結び付く可能性を秘めている。また波及効果 も大きい。

〈地域づくりは体を使って〉

・三重県南部の丸山千枚田では町の資源として多くの 棚田を有している。その棚田も農業就業者減少のた め、荒廃しているものが多かった。結果的に分かっ たことだが「まちづくりは頭で考えるだけではダメ、 体を使わなければダメ」ということだ。棚田での農 業体験を実際に体験して、棚田を活かすためのアイ デア、棚田の良さ、美しさを、農業の楽しさを実感 し、それを地域内外の人に伝えることによって棚田 に対する意識を変えることができた。また、まちづ くりのキーマンを発掘することができた。棚田の体 験農業は若い人の参加が多く、都市部の小学校では 学校単位で借りるケースもあり、授業の一環として 利用していた。また、棚田が美しく整備され、写真 家も訪れるようになった。地域の経済効果にはつな がらないが地域内外の意識を変えることができた例 である。

〈拠点型から滞在型へ〉

- ・北九州、下関の両市が観光振興の連携を図ろうと関門海峡観光推進協議会ができた。また、関門海峡周遊ガイドブック、門司港・下関・長府1日フリーチケット、関門周遊1日フリーパスポートなども発行されており、海峡周辺の交通機関が一体となって関門海峡の観光スポットをネットワークしている。両市が出資して「るるぶ関門」というガイドブックも発行することができた。このように都道府県を越えた観光振興のコーディネートは地方シンクタンクの役目の一つといえるだろう。
- ・日本全国に平家の落人伝説がある。どの落人伝説も本当かどうかは分からない。しかし物語の迫力があればうそでもいいのではないか。全国源平サミットを開催すれば何か面白いことができるのではないか。
- ・まちづくりには物語が必要だ。物語がなければ創ればいい。

ここで分科会の意見を自分なりにまとめると

- ①地域振興は行政やシンクタンクだけではできない。 住民主導でなければいい結果が得られない。
- ②地域振興は自ら体を使って行うべき。
- ③地域にあるものを活かして観光振興に結び付ける。
- ④地域にウリモノが無ければ作り出すことも必要。
- ⑤シンクタンクとの役割としては地域を客観的に分析し、住宅や関係者の話し合いの場をつくることが大切。 ということがいえるのではないか。自分の仕事にもこれらのことを極力活かしていこうと思う。

自分の身の回りを見てみても観光に力を入れている 市町村は非常に多い。参加者には多くの事例を体験さ れた方もいらっしゃったが、まだ経験が浅く、多くの 事例を聞いてみたいという方も多かった。古くからの 観光地を除いて、観光でしか地域振興が図れないよう な自治体での観光振興は、いまだ発展途上であるよう な印象を受けた分科会であった。 (小田 好一)

過疎化の町にシルバー世帯がやってきた

~隠岐島の西ノ島町で田園居住の試み~

「過疎化が進んでいた島に移住者が増え始めている」 という話を聞き、詳しく話を聞きたいと思い、島根県 の日本海に浮かぶ隠岐諸島の1つ西ノ島(西ノ島町)を 訪れた。 西ノ島には、福岡から松江までJRで5時間、松江から七類港までバスで約1時間、さらにフェリーで約2時間30分かかって浦郷港に到着した。船から降りると、土産物店が数件あるものの、観光地特有のうるささはなく、静かな漁村風景が広がっていた。昼時だったので、港近くの飲食店に入ると、丁度仕事が終わったのだろう漁師がおいしそうにビールを飲んでいた。観光客向けのヒオウギガイという珍しい貝の料理もあったが、店内は地元客で溢れ、異空間に紛れ込んだような不思議な感覚にとらわれた。

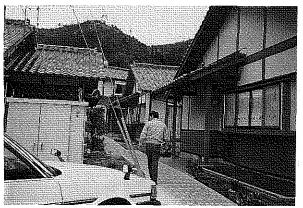
●町の2つの事業が転入者の増加をはかった

西ノ島町の人口は、昭和25年の7,463人をピークに減少しつづけ、平成7年には4,048人になった。人口減少は続いているものの、全国的な「まき網漁業就業者募集活動」によって、まき網船団の乗組員とその家族が64人、「シルバーアルカディア事業」によって高齢者29名が島外から移住している。

今回西ノ島町では、シルバーアルカディア事業について話を伺ったので、以下に概要を簡単に述べる。

●シルバーを移住対象とした事業

○この事業は島の暮らしに生きがいを持ち、豊かで潤いと活力のある町づくりを行うために、都市生活経験を持つシルバーエイジの誘致を核に、生活環境や保健・医療・福祉環境の向上など多方面での波及効果を期待し、①空き家を活用した借家、②シルバーモデル住宅、③交流住宅(町営住宅)、④分譲宅地の



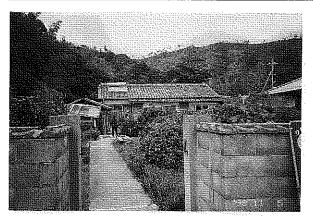
交流住宅 (公営住宅)

供給を行っている。

- ○対象者は、都会で子育てが終わったあるいは定年を 迎えたものの、まだまだ活動ができる50歳以上のペ アで、島に職が不足していることから、年金生活者 あるいはアルバイト程度の収入で暮らしていける住 民票移動が可能な人。
- ○期待される効果は、①町内の保健・医療・福祉環境ならびに生活環境整備の促進、②シルバーエイジを核とする交流人口増加による経済波及効果、③シルバーエイジの移住受け入れによる人口増加、④交流機会の増加による町民の意識・文化活性化、⑤人口および交流人口増加によるビジネスチャンスの生起また雇用の創出、⑥Uターン、Ⅰターンの促進など。
- ●町のバックアップが移住への安心感へつながった (3組の移住者の話)

シルバーアルカディア事業の流れ

平成4年度	・シルバーアルカディア構想計画策定委員会(助役が委員長)が発足 ・事業計画の本格的作業に入る。
平成 5 年度	・シルバーアルカディア構想計画策定・国土庁の新規事業である「過疎地域にふるさとを」推進モデル事業に採択される。議会承認前に、マスコミで取り上げられ全国的に知られるようになる。
平成6年度	・分譲宅地の造成に時間がかかるため、まず <u>空家</u> 10戸を借り上げとして確保。 ・修繕費に対して町が1/2を補助(50万円を限度)し、家主の負担は家賃で償還していく方法で、提供している。家賃1万5000円。 ・全国からの問い合わせに対して登録制にする。(現在570組)
平成8年度	①シルバーモデルハウス (体験型施設) 2戸建設(県町補助)賃貸期間→4日以上14日以内光熱費2,000円のみ②交流住宅(短期滞在型施設)10戸(国庫補助による町営住宅)賃貸期間→1年以内(実際は1年ごとに再契約している)対象はシルハーに限らない。現在すべて入居している、家賃3万5千円③分譲地造成(虹団地)18区画平均93坪平均分譲坪価格約38千円分譲対象者の要件としてシルバーアルカディアの対象者(夫婦のどちらかが50歳以上であること)で住民票が移動できること、また契約後2年間以内に住居建設をしなければならない等の条件で募集を開始した→平成10年現在は8区画売れ、2戸建設済、2戸建設中。現在分譲条件は緩和され、5年以内に建設、また町民の購入も可能となった。



借家(空き家活用)

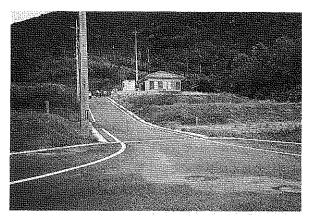
西ノ島町役場の道野さんの手引きで、移住者の方に話を伺うことができた。現在、借家(空き家を活用)住んでいる人は10組、分譲宅地を購入した人は2組、交流住宅(町営住宅)に入居した人が3組おり、それぞれ1組ずつ話を伺った。

〈借家(空き家活用)住まいのAさん夫妻65歳・63歳〉

借家住まいのAさん夫妻は、大阪から移住してきた。 以前から田舎暮らしをしたいと考え、町が移住者をバックアップしているということを新聞で見て、西ノ島町を知ったそうだ。最初移住に反対していた奥さんだが、毎日出かける釣りのこと、魚介類を子供に送ったこと、隠岐に遊びにくる孫達のことを楽しそうに話してくれた。また奥さんは、近所の公民館で開催されている生涯学習にも参加し、今の生活に満足しているようだった。Aさんが私達の見送りのために、外に出てきてくれた際、ご近所の方が通りがかり、「これから釣りに行きます」とあいさつをしていた。Aさん夫妻はずっと以前からこの島に住んでいるように見えた。

〈交流住宅(町営住宅)住まいのBさん夫妻(62歳・ 55歳)〉

Bさん夫妻は、神奈川県から来た。以前から定年になったら離島に暮らしたいと思っており、移住のために色々な地域を見てまわっていたり、情報を集めていたそうだ。しかし町のバックアップを受けて、住宅、畑を確保できるのは、西ノ島町だけだったという理由から定住を決めたとのことだった。町営住宅は、集落から少し離れたところにあるが、ご主人はボランティア活動に積極的に参加したりと、地元の人との交流はあるそうだ。普段ご夫妻は、町の斡旋で借りた120坪の畑で農業を楽しんでいる。今まで農業経験はなかったらしいが、町に農家の方を紹介していただき、1年間農



分讓宝地

業の指導を受けたそうだ。

〈分譲宅地に住んでいるCさん夫妻(63歳・56歳)〉

Charles to the Care

Cさん夫妻も以前から60歳を過ぎたら田舎ぐらしを したいと思っていたそうだ。釣りをしながら全国をま わり、移住先を探していたが、町のバックアップがな い地域では、移住者は偏見の目で見られるとのことで、 場所を決めかねていたそうだ。そんな時TVで、A夫妻 が紹介され、西ノ島町に行こうと思ったそうだ。当初 は、借家に住もうと思ったが、その時空き家がなかっ。 たので、待ちきれずに分譲宅地を購入したぞうだ。結 果としては、近所付き合いがなく、気楽な分譲宅地を 購入してよかったと思っているとのことだった。仕事 はしていないが、毎日釣りをしたり忙しいとのことだ った。Cさん夫妻は日本海の冬の厳しさを体験したこと があったので、移住先として日本海だけはやめようと 考えていたそうだ。しかし、隠岐の海に惹かれ住もう と決断したとのことだった。今年隠岐にて、始めての 冬を過ごすCさん夫妻だが、これから来るだろう北風 の話さえも楽しそうだった。

●事業の成果と問題点

この事業によって、「高齢者といっても、移住してくる人は比較的若く、60歳であれば地域の中では若い方で、地域の活力につながった。」「孫や知り合いが訪ねてくることで、交流人口が増加した。」「移住してきた人によって新しい文化が吹き込まれた。(医者や陶芸家、ボランティア活動をする人などがきた。)」などの成果があったそうだ。

しかし、「住民の税金を移住者でなく、地元のために使うべきではないか。」「住民の利益になっていない。」 などの声もあるとのことだった。

また、当初分譲宅地の造成期間中の補助的手段と考

えていた、空き家活用の借家の方が人気があり、分譲宅地は18区画中8区画が売れ残っているとのことだった。分譲宅地を購入すると住宅建設まで合わせて2,000万円かかり、余生を過ごすために、大金を払いたくないという人も多いようだ。

現在西ノ島町では、さらに移住者を増やそうと、空き家の確保に努めており、現在新しく8戸を確保しているとのことだった。

●「田舎ぐらしをしたい。」「田舎へ来て欲しい。」というニーズはあるが

隠岐から戻ってきてから、田舎暮らしをしている人、田舎暮らしに憧れている人に会ったり、田舎暮らしをしている人の本を読んだりして思った。田舎暮らしに憧れているは多い。都会の人に来て欲しいと思っている田舎も多い。しかし、実際には相変わらず、田舎では過疎化が進んでおり、都会の人も田舎に住みたいと思いながらも実践できずにいる。その原因は、両者のつながりをつけるものがないことにあると思う。その役割を西ノ島では、町役場が果たしている。この事業を計画してから移住者を受け入れるまで、町は地元説明に2年間かけたそうだ。

また、田舎暮らしにも色々なタイプがある「週末田舎暮らしをしたい。」、「1カ月に数回、田舎暮らしをしたい。」、「自分の理想とたい。」、「自分の理想とする田舎に暮らしたい。」などなど。

西ノ島では、松江から3時間30分という立地等を考えると、週末型の田舎暮らし希望者を受け入れることは難しかったと思う。定住型だから成功したのだろう。

「田舎暮らし」が過疎地域の人口減少に歯止めをかけるための手段として、色々な地域で考えられているようだが、ハード(住宅など)の受け入れ体制も大切だが、①移住者と地元をつなぐもの(人、機関)の確立と②可能な田舎暮らしのタイプを見極めることとをまず最初にしなくては、「田舎暮らし」の推進は難しいのではないかと思った。 (七搦 かおり)

グラウンドワークin ふくおか

~ 英国 GWT スタッフとの一週間 ~

福岡グラウンドワークトラスト研究会では、私も含め、昨年、一昨年とイギリスのグラウンドワークトラスト(以下GWTまたはGW)を視察に行きました。このGWTとの交流は研究会発足以前も入れて、今年で足かけ5年目になる。その間、福岡においても我々のメンバーを中心とするグループが活動を行い、研究会としての実績を重ねつつある。

そこで今回はじめてイギリスのGWTスタッフを福岡に招いてイベント等を行った。招待したのはイギリスのウェールズにあるマーサー&カノンGWTのスーザン・プライス所長とカーフリーGWTのピーター・ウィリアムズ所長、そしてGWTジャパンユニットディレクターで古賀市出身の小山善彦氏の3人。

●合い言葉は「君は素晴らしい」「金がなければ…」

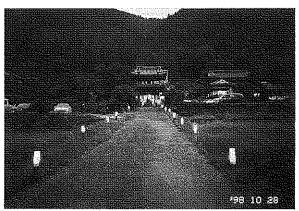
以前にも書いているが、GWTをあらためて紹介しておくと、住民、企業、行政の3者が互いにパートナーシップを組みつつ、環境改善活動や環境教育を通して地域を良くしていこうという理念で、1980年代にイギリスで発祥し国策として取り組まれているものである。福岡においては、その理念に学びつつ互いに知恵と汗を出しながら、誰もが幸せに暮らしていける地域社会を築くための活動を市民団体として行っている。我々の合い言葉は「君は素晴らしい」(ひまわりの花言葉で相手をほめる意味になる。互いを認め合うバリアフリー社会をイメージ)と「金がなければ知恵を出せ、知恵がなければ汗を出せ」である。

今回のイベントとしては、10月26日(月)からの一週間で、福岡市、北九州市、山口市で講演やパネルディスカッション、田川市、大牟田市では花壇づくりとセミナー、研究会がフィールドワークとする宮田町では小学校の環境教育実践の報告やコンサートなどを行った。

●アートの活用と子どもの参加を進める

福岡市のシンポジウムの話で、いくつか面白かった 点を挙げたい。

- ・小さなプロジェクトが成功すると地域の人々が自信 を持ち、大きなことも出来るようになる。
- ・GWは活動の中で地域の歴史やアイデンティティを



参道の手作り灯明

大切にし、それをアートとして表現することが多い。 アートは子どもたちなど多くの人にメッセージを伝 えることが出来る。

- ・地域の人や企業を参加させるためには、子どもの参加を進めることが有効である。
- ・企業に対しては資金援助だけではなく、余った資材 の提供や会議室の提供など、できる範囲の協力を求 めていく。
- ・地域住民がつくった公園等を自分たちで管理してい くためには、まず計画段階から参加してもらうこと。 そしてシンプルなデザインにすること。庭師が入ら ないと手入れできないようなものにはしない。
- ・日本におけるパートナーシップのコーディネーター の役割はコンサルタントが担っている。トラストに 発展するには人材育成とそのための組織が必要では ないか。
- ・環境問題と言ってもスケールが大きすぎると何をしていいか分からなくなる。環境問題をもっと身近なところにして参加を呼びかけて行く必要がある。

●国際交流も体験を織り交ぜて

宮田町では度々一緒に活動してきた笠松小学校で、子 どもたちがカスミサンショウウオの飼育や炭焼き体験 などの環境教育の実践報告をした。環境教育と言って も何をするのか、といった声も教育現場にはあるよう だが、自分たちの身近な環境(校区内でなくてもいい) で遊びの要素を織り交ぜながら体験し、体と頭の両方 で理解することといえそうだ。子どもたちもそこで自 信と自主性が育つらしく、先生の質問などにも我々と 一緒に活動した六年生は全員の手が挙がるが、そうで ない五年生は黙っているそうだ。

夜は、地元の瑞石寺で筝 (そう=こと) とバイオリ

ンとフォークギターの和洋折衷の演奏会を行った。お 寺までの道は、子どもたちが絵を描いた和紙を竹に巻 いた灯明を並べて、幻想的な参道を作った。

イギリスのスタッフの内、スーザン女史は3度目の来日だったが、これまでは講演をしただけで、今回はじめて日本のまちづくり活動に接し、喜んでおられた。やはり双方の情報提供があって交流になる。シンポジウムだけでは地域づくりにならない。本場のGWTには到底及ばなくても、アクションの現場を見せ、一緒に花壇を作ったことは相手にとっても良かったと思う。

(伊藤 聡)

3千円の予定消費が2百円に。使うお金が少なくて 残念というお話 ~生月島くじら館にで

平戸の先の生月島に行ったとき、くじら館という島の博物館のような施設があったので入ってみた。生月島は近海ものの捕鯨船団が近世まであったという。

展示資料は面白く、鯨にもずいぶん詳しくなったような気がした。入り口では南氷洋捕鯨船のドキュメント映画のビデオが流れていてとても感動した。

記見終わったのち、私の頭の中では「鯨に詳しくなったから、あとは鯨を食べておなかを満足させて、あのビデオを買って事務所でみんなと一緒に見よう。総額で3千円程度ならまあいいか」と財布の紐を緩めるつもりで立ち上がった。旅先での出費なんか大抵こういう簡単な気分でできあがるのだ。

しかし、土産店兼喫茶店のようなところでは、食べさせることもなし、土産は鯨のぬいぐるみなど、という状況で非常に残念。一挙に心の財布の紐は固結びに。ないことが分かっていてもあきらめ悪く聞くのが人間の性。「鯨料理は本当にないの?」「入り口のビデオは売ってないの?」というと若い店員さんは極めてドライにゴメンナサイ、アリマセンとのこと。

そこへちょうど館長さんと思しき人が通りかかった ので聞いてみた。すると「鯨は生月に揚がっていない から料理はムリだけど、ビデオならダビングしましょ うか?」と気軽に応じて下さった。救われた気分でお 願いする。何でも著作権は日本捕鯨協会にあり販売で きないということらしい。ここに来た人の中には我々 と同様、問い合わせる人もいるらしい。 私:「値段はいくらですか?」

係員:「実費代と送料分で良いです。」

私:「あの内容からみて2,000円はするなあ。」

係員:「いえ、テープ代215円(税込み)に送料360

円で、しめて575円です。」

今まで、お金をふんだくられて残念ということはあっても、予定していたお金が使えなくなって残念というのはあまりない。日曜日でもお客が少ないこの施設で、ビデオを売ったら少しは収益の足しになろうに……とも思うのだが、安いので文句も言えない。

後日、事務所でみんなを集め、部屋を暗くしてビデオをワイワイ騒いで見てあらためて感動。そのまま中州の鯨料理屋におしかけ「生月の仇は福岡で」とばかりによく食べた。結局、生月で予定していた額の倍以上を地元で払っているのである。地域間収支の差は案外こんなところでついているのかもしれない。

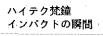
(尾崎 正利)

事務所近辺の天神・博多散歩Ⅱ

天神に先端技術の鐘の音が響きわたる。

お正月の除夜の鐘を打つ姿をみると、お坊さんが、撞木を何度か引き、最後に大きく引いて、勢いで打つ。だから、音がするタイミングと状況がよく分かり、聞く側も心構えが出来る。しかし、12時になると前触れ無しに、いきなり無人で「ボーン」と鳴る梵鐘が当事務所近くにある。

この鐘がある『正興山勝立寺』は、慶長8年(1603)、 黒田如水の息子長政の頃(キリスト教が弾圧され始め た頃)に、京都から来たお坊さんと、キリスト教神父





との宗教問答から生まれた寺である(坊主が勝ち、キ リスト教の土地に寺を建てた)。

ここは戦災に遭い全焼し、現在の姿となっているが、 その姿も鐘同様、近代的である。地下1階の地上3階の 鉄筋建築で、どうやら地下駐車場は管理委託している らしい。

この話を事務所内でしていると、昔、手を叩くと扉が開き、「チーン、チーン」と鳴るハイテク仏壇があった、という話で盛り上がった。結局、この仏壇は、手を叩く音ではなくて、大きな音で反応するために、窓の外の車が通る音に反応し、ひっきりなしに「バタン、チーン、チーン」といっていたそうだ。人間の高い(ハイな)手と苦が良いこともありそうだ。

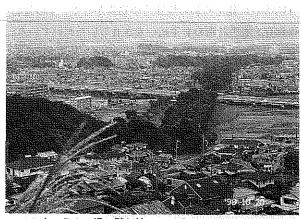
(澤谷真紀子)

所 員等近常況 中方以前的中華教徒

翻 大宰府水城跡の全貌を眺める

福岡に来て3年、恥ずかしながら大宰府といえば「太宰府天満宮」としか知らなかった。しかも、自宅から自転車で20分くらいの所にある「水城跡」などは、そこを通るたびに、「小高い丘があるなあ」としか思っていなかった。

ところが、太宰府市の史跡活用の調査をお手伝いしている関係で、水城跡の全貌を眺められる場所に連れていっていただき、驚いた、「緑の壁がある!」と。近くから見ると、何があるのか、全く分からなかったが、遠くから見てみると、この水城跡が何のために建設されたのか(本当に恥ずかしながら)全く知らない私でも、当時の土木技術の粋を集めて建造された緑の壁に感動して、「すごい、すごい」を連発していた。



はるか向こうまで緑の壁が続いている

さて、事務所に戻り、大宰府に関する本を探してみた。水城跡を含む、大宰府の史跡については、観世音寺の副住職であり、西南学院大学の文学部教授でもある高倉洋彰先生の高著、『大宰府と観世音寺』(海鳥ブックス)に詳しいので抜粋する。「663年、白村江(はくすきのえ)の戦いに破れた日本の百済救援軍は緊張の渦に直面、こうして軍事都市大宰府が建設される。(周囲の山々が天然の要塞の役目を果たしたが)…ただ福岡平野奥の狭隘部が両山地の切れ目としてあり、玄界灘と有明海側唯一の通路となるため、ここを遮断する必要がある。そのための施設が水城であり…」。 大宰府を訪れるのであれば、是非、最初に水城跡を上から眺め、この地の奥深さを感じていただけたらと思う。

(澤谷真紀子)

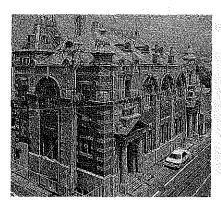
蹶大学と地域の連携の元年となるか

筑豊地域の企業とヤリングの時に感じたのだが、大学は中小企業にとってはまだ敷居が高いということだった。前号で佐賀の大学と地域とのつながりの動きを書いたが、まだ多くの企業は大学との連携に消極的であり、その原因の多くはこれを仲介する機能が地域に不足していると思われる。各地に産学連携のシステムが構築されつつあるが、始まったばかりで、実を生むのはこれからという思いを強く感じた。新産業の創出に大学のシーズを活用するという方向がいろんなところで提案されているが、今のこういう状況の中で、本業で精一杯という企業が、大学と積極的な連携を求めているのかどうか。連携を進める役割を担うべく設立された機関の存在が問われる時が来ている。

(山辺 真一)

翻 旧唐津銀行は街中のにぎわいの拠点になれるか

佐賀県唐津市の商店街の一角に「旧唐津銀行」という明治末に建てられた煉瓦造の建物がある。その建物の保存・活用計画のお手伝いをさせていただいている。



旧唐津銀行 外観 この銀行は長い間、辰野金吾(東京駅や日本銀行本店などの国家的プロジェクトの設計を手がけた建築家)が設計したと信じられていたが、実の設計者は弟子にあたる田中実(まこと)で辰野金吾は監修という位置付けになっている。

歴史的建造物に興味のある私はこの建物を見たとき 感動しっぱなしだった。「こんなすごいものが唐津にあ るなんて。」といった感じだった。現在、耐震調査中の 建物内部も細かく見せていただいた。内装もかなり凝 っている。オープンは平成14年以降の予定、これが唐 津のにぎわいの拠点になればと思う。

(小田 好一)

翻マインドのある人間と『~じゃないですか』

10月21日の毎日新聞のコラムを見て衝撃を受けた。新聞の内容は「『~じゃないですか。』と言われたら(言った本人が意識していなくても)そのことを知っていて当然というニュアンスまで生むことが多い。つまり、だれかがその言葉を言った途端、そのことが、既存の事実と化してしまう、実に巧みな言い回しである。」ということだった。そして『~じゃないですか。』という若者に対してどうして「自分は~だ。」と言えないかと怒っていた。

私は、この『~じゃないですか。』をよく使う。多く 使うことでは、所内で1、2位を争っているのではない かと思う。

先日、仕事でお付き合いのある東京の方と食事に行く機会があり、「マインドのない人間はダメだ。間違ったマインドでも持っていれば、やがて間違いに気がつく。」という話を聞き、ドキッとした。

『~じゃないですか。』はマインドのない人間の言葉だと思う。私のマインドが錆びついてしまわないように、『~じゃないですか禁止令』を机の上に貼っている。

(七搦 かおり)

M ソバ打ちと合わせたピアノ演奏を聞く

数年前に嘉穂町のまちづくり計画のお手伝いをした 関係で、町の方からいろいろとイベントのお誘いを受 けることがあり、一昨年は、まちづくり委員会主催で 遠賀川の源流に近い里山に広葉樹を植樹するという活 動に参加させていただいた。(よかネット27号に掲載) 今年は、ソバ植え〜ソバの花見コンサート〜ソバ刈り 〜ソバ打ち体験までができるイベントに参加したが、あ いにく都合が合わず、最後のソバ打ち体験を残して10

当日は、あいにくソバの花はモンゴル産のソバだけが八分咲きで日本産のソバは5分咲きといった感じであったが、ソバの花を見ながら関係者や参加者を入れておおよそ40~50人の中で、第1部のジャズ演奏が始まった。第2部が意外な試みで面白かったのであるが、嘉穂町に移り住んでいる出張ソバ職人の進さんのソバ打ちの動作や音に合わせて、ピアノ演奏が始まった。ピアノ演奏者は、かつて精神治療のひとつである音楽療法を行っていたという進さんの奥さんで、この日はまさにぶっつけ本番ということであったらしい。ソバ打ちの動作やリズムと演奏が、少し合っていないというところも感じられたが、秋空の下、少し心地よい体験をさせていただいた。 (山田 龍雄)

図 "じねん蕎麦打ち大会"への参加者大募集

去年6月13日サツマイモを植えたのが、農作業の始まりだった。それ以後を略記する。

○7~8月、サツマイモ畑の草とり

- 8月29・30日、蕎麦種蒔き 彼岸には真紅の彼岸花と純白の蕎麦の花が共存して いた。
- ○9月26日、秋ジャガイモを植えた。
- ○10月10日、サツマイモ堀りはじめ、この頃が一番うま かった?
- ○11月3日、陶友の人々も加わって本格的な芋堀り。
- ○11月7日、蕎麦刈り始める。終わりは11月22日。
- ○11月28日、SASイモ堀り。
- ○12月6日、蕎麦脱穀終了。

一寸不思議なごとをつけ加える。この、地元の小母さんたちのやっているそばの店の近くに夷巍寺がある(一貴ではない)。なぜこんなこところに夷とか巍とかいった字がでてくるのか。邪馬台国論争のもとは、三国志魏書東夷伝からで、「倭人伝」は正確ではない。この寺の側に蕎麦屋がある。 (糸乗 貞喜)



偽装する日本

中川 埋 著

美国海通 医电子性 医乳腺性 电线

彰 国 社

これは、先日(11月17日)、福岡県建設技術情報センター主催のセミナー「地方自治体と公共施設のあり方」で今里滋九州大学教授が問題提起としてあげられていた本です。

この本をめくると、全国各地にある漫画や絵本から出てきたような公衆トイレ、公衆電話、橋から学校など、よくもこんなに見つけたものだというくらいに「かわいらしい」公共施設が出てきます。この本の著者である中川理京都工芸繊維大学助教授は、こういった現象を「公共施設のディズニーランダゼイション」と定義づけされています。これらの公共施設は、ディズニーランドの「夢と魔法の王国」と同じようなテーマでデザインされているが、ディズニーランドのような閉鎖された空間ではないため、公共施設の立地する場所や施設の用途からテーマの関連を失っているというもの

です

例えば、カエルをデザインした橋を造り、町のシンボルにしようというものや、古くから町に伝わっていた鬼を活用して、トイレや電話ボックス、博物館など町の至る所鬼だらけの町もあったりします。これらの多くが1989年のふるさと創生事業によるものが多いようで、地域おこしやまちづくりの起爆剤となるために施設がつくられているようです。

建築物の中には、あまりにもデザインが幼稚で、玉手箱のトイレや公衆電話を背負った旅人など、思わず笑ってしまうものも少なくなく、もっと芸術や文化に対してレベルアップするような、幼い頃からの教育にお金をつかった方が良いのでは…と思うところです。

(歌丸 屋子)



エビと日本人

村井 吉敬 著

岩波新書

中学生の時に姉に連れられ、飯塚市のある食堂で食

べた天丼の美味しさは、私にとっては今でも忘れがたい思いでの一つとなっている。「エビ」という食べ物は「バナナ」と同じく、当時、私たち世代にとって特別な食材であったように思う。昭和30年代~40年代のはじめ頃まではエビは正月か、何か祝い事のときしか食べられない高価な食材であった。

このバナナとエビという2つの食材は、輸入の急増に よって今や大衆化した商品となっており、何か祝い事 で出されても、これらを有り難がって食べる人は少な いことと思う。

この本は、「バナナと日本人」の続編であり、10年前の1988年に出版され、すでに読まれている方もいると思うが、エビが大衆化していった過程と現地でエビに関わっている人々の姿を追い求めたドキュメントとしても読み応えがある。

この本によると12年前の1986年当時のエビ輸入量 (有頭換算:無頭の約1.5倍)は約32万トン、国内生産 量は約5万トンであり、この時期既にエビ消費量の約87 %が輸入品であり、また、日本人1人当たり年間消費量 は3Kg、約65~70尾(1尾当たり45~50g)を食して いたと記されている。

この本では1986年のデーターしかないので、その後のエビ輸入量が気になり、日本貿易年表で調べてみると輸入量は着実に増加し、1993年以降は46~48万トン(有頭換算)で、1996年時点での国内エビ消費量の約93%が輸入品であり、実に1人当たり3.9Kg/年を食していることとなる。正月のおせち料理の一角を占めるエビ料理は、そのほとんどが遥かインドネシアかタイなどの東南アジアから輸入されてきたものだろう。

この本で興味深いのが、インドネシアの末端のエビ漁民が、日本で消費される価格のどの程度の部分を労働報酬として受け取っているのかを算出している点である。これによると1986年当時の消費者価格は1Kg当たり4,000円であり、漁民が最初の仲介人に売る値段が770円/kgであるが、減価償却費や諸々の経費を差し引くと純利益は300円ぐらいであり、消費者末端価格の実に7.5%しかならないらしい。今でも輸入ルートの構造が変わっていなければ、この構成比は変わっていないであろう。

また、この本では最後に、我々の食べ物の豊かさは、 第3世界の海でエビを獲り、あるいは養殖し、それを商 社が冷凍保存し、我が国に運んでくるという膨大なエ ネルギーを費やしていること、また、エビの高密度養殖も他の魚介類の犠牲(養殖車エビは、成長するまでの体重の10倍の魚介類を食べる)の上の成り立っていることなどを指摘している。

とにかくも、他の食材に比べて、日常的にはそれ程 食べる必要もないエビをこれだけ大衆化した商社や水 産業者の努力には関心する次第であるが、大衆化する と有り難みも失われるようだ。 (山田 龍雄)

- 編集後記 —

翻今回、太宰府及び周辺の史跡の話が記述してあるが、実は、私も5~6年前ぐらいに太宰府では天満宮と都府楼跡しか訪ねたことがなく、やはり近辺の市町村のことは仕事の関係以外では詳しいことは知らない。また、よほど地域のことに興味をもってアンテナを張っていないと見過ごしてしまうことが常である。特に、水城の上から撮った写真を見せてもらい是非、実物を見たいと思った。

地元の方は見慣れすぎて地元の良さを知らないとは良く聞く話であるが、太宰府及びこの近辺の町も同じことなのであろう。これを機会に近辺の町の歴史を少し調べてみたくなった次第です。

図今回、北九州市で行われたシンクタンク協議会合同研修会で門司のレトロ地区を2年ぶりに訪れたが、かなり整備が進んでおり、平日にも係わらず中高年の少グループが来ていた。レトロ地区の隣接地に景観論争で紛糾していた高層マンションが外観を表していたが、市と調整したとはいえ、やはり異様な感じは歪めない。このマンションを設計した著名な建築家は「100年も経てば、このマンションもレトロになる」と言ったというが、手づくりの味わいが残っている明治・大正頃に建てられた建物とは、時間が経ったとしても、その価値は段違いに違うと思うのであるが……

よかネット NO.37 1999 1

(編集・発行)

㈱九州地域計画研究所

〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

(ネットワーク会社)

㈱地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-942-5732

名古屋事務所

TEL 052-265-2401

東京事務所

TEL 03-3226-9130